

芥川龍之介「藪の中」論

「死骸」の現前と「中有の闇」をめぐって

倉井 香矛哉

・はじめに

芥川龍之介の短篇「藪の中」は、『新潮』一九二二(大正一一)年一月号に発表され、のちに『春服』、『沙羅の花』、『將軍』、『芥川龍之介集』に収録された。『今昔物語集』巻一九の「具妻行丹波国男於大江山被縛第二十三」を主な典拠としており、古典文学に材を採ったいわゆる「王朝もの」としては最後期にあたる。本論では、テクストの舞台装置として想定されている平安期、律令体制の崩壊過程における都市空間に着目しながら、穢と清めの観念の判定者という役割を担っていた検非違使が聴き手として設定されていること、また、平安時代の婚姻制度においては母系型族制の上に男子父系系譜が辿られていたことを補助線として、「若狭の国府の侍」として語られる金沢の武弘とその妻である真砂を襲った出来事を「貞操観念」と「色欲の情」といった用語で意味づける先行言説を相対化したい。そして、自己の〈外部〉から到来する「欲」によって自らの死を招き、朝廷を中心化する権力構造からの逸脱を余儀なくされた武弘の受動的な主体性、ならびに、「清水寺に来れる女」として表象される真砂の「懺悔」をめぐって

て、穢れ・清めという宗教的なコードからの考察を試みるとともに、テクストの末尾箇所における「中有の闇」という表現を意味づけていきたい。

・先行研究

同時代評として、宮島新三郎^①は、「手ごめにされた後の女の心理」に「貞操観念と色欲の情との錯綜混戦をにらんだ所」に「作者」の「深い根本の動機」を見出している。また、発表年次はやや下るものの、「新感覺派の驍將」として活躍した横光利一は、「芥川龍之介氏の作には構成派として優れたもののあるのを発見する。例へば「藪の中」のごときがその一例だ」として、片岡鉄兵や金子洋文とともに「感覺派文学」の系譜に位置づけている^②。

先行研究の傾向としては、典拠とされる『今昔物語集』や西欧文学とのあいだの関連づけをはじめとして、事件の犯人をめぐる「真相探し」と呼ばれる読み、あるいは、「懷疑的な人生観」を把握する読み、といったものがみられる。長谷川泉^③は、作者である「芥川」の「シニカルな凝視」は、「一